Hakuai Story

博愛物語

夢が結実（かたち）に（Ⅱ）

父親の夭折(ようせつ)は、息子たち２人が就学時の悲況(ひきょう)だった。

家庭の大黒柱を失った現実は、否応なしに、生活苦を伴う険しい日々が待ち受けていた。予期のない父親との死別に、周到な準備が有り得る筈もなく、総ての備えは欠如していた。

早速、それまでの住まいだった官舎を退去しなければならなかったが、この不測の事態を恰(あたか)も予知していたかのように、父親は、中古の一軒家を数年前に購入してくれていた。二段に及ぶ石積みの高台に建つ建付けの軋(きし)む家屋だったが、如何(どう)にか、風雨は凌(しの)がれた。

つれあいの死後、心の支柱(ささえ)を失った母親も直ぐに患って、学費などの出費が、甕(かめ)の水を飲み干してゆくように蓄財を減らし、これまで味わったことのない貧窮な生活を強いられた。収入は、３ヶ月毎に支給される遺族年金のみで、父親の退職金を取り崩しながら青色吐息の生活(やりくり)だった。

結局、父親が亡くなった後も退職金や年金に姿を変えて家族の家計を守ってくれていた。

一刻も早く収入の確保を図らないと家庭が崩壊する。家計の収支に調和を欠いた年金暮らしにも限界があった。退職金も間もなく払底（ふってい）するであろう。

この現実に、自らの人生の岐路を選択しなければならなかった。結局、大学進学を諦めた。

71 年、就職を優先させる目的で、数々のアルバイトをしながら専門学校に入学した。選択した専門学校では、2 年間に及ぶ充実感の得られない不健康な日々が続いた。

73 年、第４次中東戦争の勃発で、 国内で第１次石油（オイル）ショックの嵐が吹き荒れた。石油製品のトイレット・ペーパーや洗剤が買い占めで、総ての小売店から消えた。地球資源の有限さを、初めて思い知らされ、日本経済が、如何（いか）にグローバルな流通基盤の上に成り立っているかを認識させられた。

この年の２月の就職試験では、M自動車販売会社とN電算機製造会社からの合格通知が届いていたが、意識の何処かで医療との接点を望んでいた。

そんな折に、小さな求人広告が目に留まった。K市医師会長のM氏が、この春に開設を予定する健診施設の情報処理士としての急募だった。採用の条件は、既に、合格の決まっていた大手 2 社に比べて、随分と地方色の濃い条件だったが、「医療」という二文字に心が動いた。どこか憧れに包容された親近感のような気分が心に湧き立った。

この開設予定の施設は、医療機器メーカーの国内大手であるT社が、米国の健診施設を模倣した商品だった。日本向けの機能に改造して、医療機関への販路を目論んだ画期的な商品だった。商品名を、「自動化総合健診システム」と称し、建築設計から使用する医療機器や電算機、その運用ソフトまでの一式を提供する健診サービスの総合的商品だった。

往時（とうじ）の健康診断は、労働基準法に基づく検診車による職域巡回検診か、診療の片手間に実施する診療所での簡易検診か、人間ドックと称する総合病院での多項目検診のみであった。

この「自動化総合健診システム」を導入する診療所は、治療行為は行わず、保険診療とは無縁の医療施設だった。

往時（とうじ）の診療所のほぼ総ては、保険診療を行う施設であり、健診機能のみに特化した、而（しか）も公的保険の適用を除外した診療所（検査主体の自由診療）は、何処を探しても存在しなかった。自動化された多項目の検査を実践し、電算機（コンピューター）による情報処理を行う他に類を見ない画期的な医療施設（診療所）の誕生だった。現在（いま）の「ウエルネス」の原型である。

採用試験の面接会場で合格を言われた。

初めての給料日には、父親の好物だった餡（あん）の詰まった団子と未開封の袋を鞄に忍ばせ帰宅した。母親にふたつの袋を手渡すと仏壇の父親の位牌に涙まで添えて報告してくれた。

漸く、これで家計も一息入れることが出来た。この職場で過ごした6年の歳月は、若き日の懸命な研鑽の想い出が詰まった時期となった。いま想い返しても、この頃だけが、人生で、唯一、自由三昧、放埒に生きたように想われる。

父親の癌の告知を聴いてからは、友人達とは全く異質な青春時代を過ごしてきた。家族を守ろうとする堅牢な意識が體に染み付いて、真の実力とは無関係に、いつも過剰な庇護意識で母親や弟を守ろうとしていた。

そんな意識を抑えて、この頃だけは、自己を優先させた。生まれて初めて味わう開放感が、若さも手伝って、何とも心地よかった。憧れの職場も魅力的だった。

身近な医師や医療技術者の同僚達が話す医学用語は、とても新鮮で、資格も無いのに専門書や医療雑誌を読み耽った。

時間を忘れて、同僚の面々と議論を交わし、時には、臨床

検査や放射線検査の真似事までもさせて貰った。X線写真や心電図の読映も専門医師からのご教授を戴いた。

往時の電算機は、小型化が図られた現在の電算機と比べると想像を超えて巨大で、専用の電源や空調設備を有した専用の部屋で稼動していた。

背丈を越す大型の磁気記憶装置の背後には、保守点検のための狭い空間が在って、いつも、そこが寝床だった。寒冬の夜には、電算機の吐き出す熱気に包まれ、床に毛布と掛け毛布での就寝だった。毎晩、心電図の解析用に納品された自動判定の改造に没頭しながら職場での泊まりが幾日も続いた。そんな過労の日々にあっても、職場で過ごす時間が、それまで味わった経験が無い程に、初々しく、愉しくて仕方のない充実した時間だった。

この医療の現場で知識を得たり、あらゆる経験を積むこと

が、あの不遜な夢に近づいて往(ゆ)けるような気がしていた。

「いつか病院を創るから、その時は、きっと手伝ってよ」。

夢中で、同僚たちに話したものだ。

あの同僚たちは、どんな情感(おもい)で、

あんなに黙って、根拠のない夢(はなし)を

聴いてくれていたのだろう。

「ここよりもっと素晴らしい

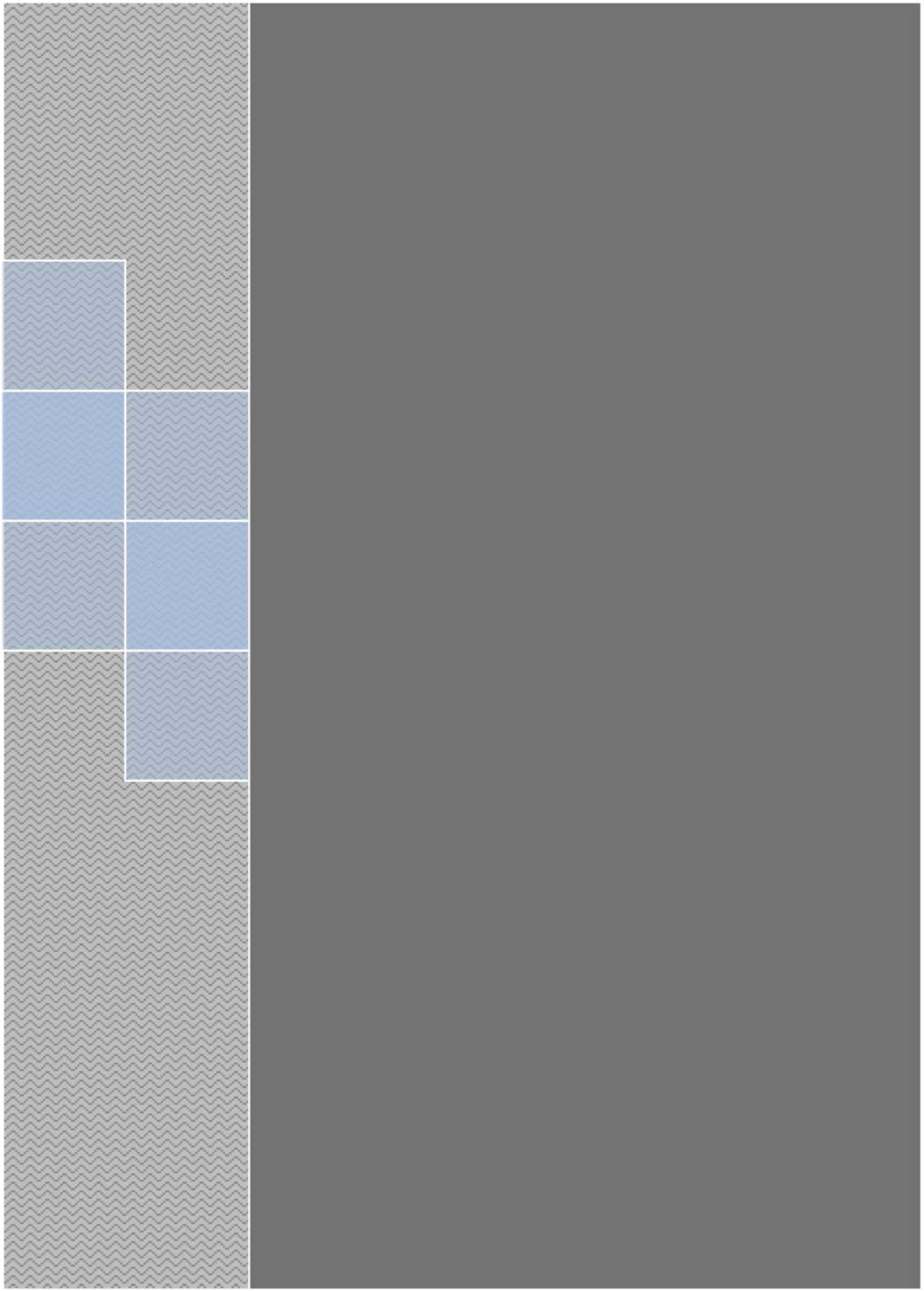
健診施設も、いつか必ず創るから……」。

問われれば、手掛かりすら探せない確証のない青臭い夢を、

臆することもなく、夢中で、周囲の人たちに語っていた。

著者　　那須　良昭

発行所　　特定医療法人財団 博愛会

〒810-0034
福岡市中央区笹丘 1-28-25
tel:092-741-2626　　fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます